

英國産業革命の主體的考察

——商工企業者及勞働者の自己覺醒の過程を中心として——

堀

潮

—

産業革命はいろいろの面に於て觀察される、之を國民經濟的に觀れば農業英國が工業英國（Workshop of the world）へ轉化の發足點であり⁽¹⁾、工業組織の上から觀れば中世的ギルド制度の完全なる破壊であると同時に家内工業制度より工場制度への移行であり⁽²⁾、社會的には近世的階級分立の出發點をなす⁽³⁾。之等の觀察は皆夫々の面に於て、此の革命がもたらした特徴を適當に捉へて居るとは云へ未だ全幅の説明を與へて居るものと爲すことを得ない、トインビーは革命の諸特徴のうち思想的變革に重點を置き

33

The essence of the Industrial Revolution is the substitution of competition for the medieval regulations which had previously controlled the production and distribution of wealth.⁽⁴⁾

英國産業革命の主體的考察

と説き急激なる商工業の發展に伴ひ全面的に現はれて來た自由競争の瀰漫に特別の注意を拂つて居る如くに見ゆる、之は上田博士も言へる如くたしかに一つの卓見には相違なきも、トインビーが其の名著産業革命論の中に於て特に自由競争を高調した動機を考ふるに、彼は人も知る如く熱情的社會改良論者であり、牛津大學のテューターとして活躍せんとしつゝあつた十九世紀の終末英國が深刻に悩みつゝあつた社會不安に就き深き省察を加へた結果、その根源が正に極端に發達した自由競争の弊害に外ならぬことを突き止め、而して其の由來を尋ねて産業革命の時期まで遡り、産業革命こそ當時の社會不安に對する責を負ふべきものなることを明らかにせんとした、『文化 Civilisation なる語の意義は實に自由競争を如何に制限するかにかゝる』と極論した彼の氣持ちが此の邊の消息を雄辯に物語る。

併し乍ら産業革命の一つの重要な特徴が自由競争であると言つただけでは意味をなさぬ、それが經濟的、社會的乃至思想的發展史の中で如何なる地位を占むるか、如何なる歴史的過程を経て社會不安を産み出す原因を作つたか、社會不安にまで到達するのが自由競争を根基とする産業革命期以後の英國經濟の必然の過程であるとするならば如何なる制度と運動の上に此の如き推移がもたらされたか等を探るのでなければ完全とは言ひ難い、勿論トインビーと雖も自由競争を問題とする場合に於て、或ひは之を正統派の經濟學に照應し、或ひは自然法學說と賃銀との關係に就き考察を廻らす等其の眞摯なる學的研究態度には尊敬の念を描むものではないが、然かも彼の勞作の最終到達點は自由競争の一般的認容が如何に賃銀労働者を惨めなる状態に陥れたかを闡明するにあつて、労働者自身の自由競争の自覺、言ひ換へるならば自己覺醒の發展史の中に於ける労働者自身の地位の變化に就ては當然考へらるべきであるに拘らず深き考察が拂はれてゐない、十八世紀の二大哲學者ホッブス及ロック以降の英國の文化發展史は國民の急激なる自己

覺醒の歴史であり、此の面に照すに非ざれば十九世紀の英國の目覺ましき經濟的發展は固より同期より二十世紀初頭にかけての華々しき勞働者の運動も其の眞髓に徹することを得なうと考へる。

- (1) G. D. H. Cole, A short history of the British working-class movement.
- (2) W. Ashley, Economic Organisation of England. chap. VII.
- (3) Arnold Toynbee, The Industrial Revolution of the Eighteenth Century in England. chap. VIII.
- (4) *ibid.* p. 64.
- (5) 上田貞次郎 英國産業革命史論

二

産業革命は十八世紀末に於ける連續的な紡績機械の發明に其の端を發すると一般的に言はれるが此の解釋は皮相の
見解たるを免かれない、此の關係はコールも言ふ如くむしろ逆であつて諸種の機械の發明が産業革命を誘發したので
なく、當時の經濟的必要に應じて機械が發明せられたと云ふよりは機械の發明が實際に應用せらるゝに至つたのであ
ると觀るべきである。⁽¹⁾單に機械の發明と云ふ點だけより見れば従前と雖も諸種の經驗が爲されたことは多くの歴史家
の證明する處であり、それが世に出でなかつたのは之等が用ゐらるべき經濟的素地が未だ充分に熟してゐなかつたか
らに外ならぬ、然るに十八世紀の初葉以來英國は對外的には和蘭に代つて商業の霸權を握らんとしつゝあり、對內的
には特權地主階級と商工業者との利益の微妙なる一致⁽²⁾による羊毛工業の隆盛を見つゝあり、其の生産品に對する内外

市場の擴大は必然的に能率的な生産を要求した、機械の發明乃至その實際的應用は此の切實なる經濟的要求に對する應答であつたのである。

扱、コールは産業革命を招來した動因を以て資本主義にありと爲し、産業革命が資本主義を確立したのではないと説くが筆者は此の點全くコールと反對の立場に立つ、是れ蓋し資本主義制度に對する解釋如何による見解の相違であること後段説述する如くである、今コールの立場を考ふるに彼は資本主義を以て資本の力が經濟運動部面に大きな役割を演ずる様になつた制度と解するのである、之を商工業組織の發展史に徴するに、中世以來の典型的な經濟活動の本體たるギルドは各生産單位の主人たる親方 (master) の横の組合であり、縦の關係たる親方及ジャーネーマン (Journeyman) を結合するものではなく、而して master—journeyman—apprentice は夫々一個人の生涯に於ける段階であつて階級 (class) にあらざるが故にギルドに這入る唯一の方法は先づ丁稚 apprentice になることより以外にない、此の如くして一定の年期奉公を了へた者がジャーネーマンとなり充分に仕事を體得した上親方となるのであるが、此の場合親方たるの資格審査權は親方の中央組合にあること勿論である。此の故にギルドは階級的色彩の濃厚なる雇主の組合 (Employers' Association) 又は勞働組合 (Trade Union) とは全くその性質を異にする。

然るに此の制度は十八世紀の初葉以來漸次其の規則を嚴格に遵守しない者が續出し、茲にギルド崩壞の徵候が現はれる、ギルドには嚴格なる規定があつて一親方が雇ひ得べき職人の數は極端に限定せられてゐた、其の理由は或る生産單位の大規模に膨脹するのを防ぐ爲めと從て起る富の不平均化を矯正する爲めであつたのであるが此の關係は工業生産と共に商業を營む親方によつて先づ破られる、商業は比較的小人數にて多量の商品を取扱ふことが可能であり、

且つ資本の廻轉率が他の産業よりはるかに大である、此の利益は取扱ふ商品が贅澤品とか貴金屬である様な場合にいよく其の威力を發揮する關係上資本が此等の商人の手に集中したのは自然の成行きであると同時に親方間の富の不平均が起つたのも當然の趨勢である、此の新狀勢は必然にギルドの關係に大なる變化を生ぜしめた、初期のギルドは組合員たる親方の富力が均分してゐた關係上組合の中に於ける各親方の勢力も同一線上に略々併立してゐたのであるが、既にして或る一人の親方組合員の富力が著しく増大して來ると他の多數の組合員の勢力が失墜し彼等は茲に組合に對する發言權と容喙權とを或ひは制肘せられ或ひは喪失し組合の中に於ける支配從屬の關係が出来上る、更に此の關係はギルドとギルドとの間に於ける *hierarchy* を作り上げ或る經濟的に弱小なるギルドは他の強大なるギルドに從屬する事になり種々の點に於て制限壓迫を蒙るに至る、此の重壓の下に勢力を失墜した工業はギルドの支配を受けない地方、即ち都市を出で隣接の町村へと移動しギルドは都市のみに残ることとなる、加之支配權を失つた親方乃至親方となる資格を有せざる者など悉くギルドの煩はしき規定の束縛を免かれんとして郊外に移つて生産に従事し工業はかくの如くにして都市の外に發達する結果を招來した、彼等はギルドの販賣價格の規定に従ふことを要せざるが故に其の生産物は當然にギルド組合員の生産物より安價であつたので商人は喜んで彼等と取引する様になり茲に之等の小工業者と消費者との間に立つ中間商人 *middleman* の勃興を見るに至つた。一方十七世紀末紛亂に紛亂を重ねた政治界宗教界の争ひはウィリアム三世の迎立と議會制度の確認によつて一應安定し、中央政權の確立は商人の企業心を刺激して彼等の全國的な乃至對外的なる活躍を容易にし英國はギルド旺盛時の封建的地方的經濟の時代を脱して茲に國民經濟の時代に這入ることとなり、資本の集中が行はるゝと同時に其の經濟界に於ける力が新たな意味と重要性とを

有つに至つたのは争はれない事實である。

此くの如き商工業界の急激なる變化が機械の發明を促がし遂に『革命』の名に應はしき産業界の大變革を惹起するに至つたのであるが、コールが上述の如き前産業革命期に於ける大變革を齎らさんとしつゝあつた經濟上の力強き動向を重視し通説に對して警告を發したのは正しとするも之を以て直ちに資本主義と呼稱することが適切であるかどうかには就ては研究の餘地が存する、假りに資本主義を以て所謂科學的社會主義者が定義した如く「一方に於て多數の資本家が資本を據出することに依つて事業を組織し經營し之を指導する全權を有し、他方に於て多數の勞働者が單に勞力のみを提供して生産に參與し、之に對して一定の報酬を受くることに依つて資本家に對して隷屬的雇傭關係に立つ經濟組織である」と解釋するとしても、此くの如き制度は完全に工場制度の成立以後の產物であつて如何なる意味に於ても産業革命以前に存在したとは言ひ得ない。

更に吾々が看過してならない一ツの要點は、コールの上述の解釋の中にも、社會主義者の右の定義の中にも、資本主義の構成要素としての最も重要な一點が考へられてゐないと云ふことである、資本主義を以て資本の力が強く感ぜらるゝ様になつた制度又は資本家と勞働者とが劃然と對立するに至つた制度と爲す何れの解釋も言はゞ出來上つた制度の客觀的觀察であつて、制度を動かす原動力たる主體の姿は浮んで居ない、此くの如き觀察の態度は、觀察者自身が一應自分の中から抜け出でて第三者の立場に立つて自己を觀察して見る所謂客觀主義の立場のそれであり、それは英國式なものの考へ方の特長でもあるのであるが茲には之を問題としない、問題は純粹に客觀の立場に立つ態度が制度を制度として靜態的に觀察し之を創り上げ動かす處の主體の活動を一應制度から切り離すか、又は重要なポイ

ントとして之を取扱はない傾向を有つ點である。資本主義制度はゾンバルトも言へる如く之れが中心を爲すところの資本家の活動の精神を描くことなくしては劃然たり得ない、否むしろそれを描くことによつて始めて制度そのものも明瞭に浮び上る關係にあると考へらるゝ、而して此の事情は産業革命期に於ける彼等の活動の狀態及び彼等の活動の根源をなしたイデオロギーを叙述することに依つて明らかになるであらう。

(1) G. D. H. Cole, *Opt. cit. chap. II.*

(2) 産業革命迄の英國の重要産業は羊毛業である、羊毛の需要増加により地代は騰貴した、故に地主議會は常に羊毛産業に特權を與へて來た、此の狀態は新たな工業主が政權を要求し出す迄改革の必要を見なかつた。

(3) G. D. H. Cole, *Opt. cit. chap. II.*

三

何故に産業革命が先づ英國に起つたかの問ひに對してはいろ／＼の答へが與へられる、その典型的なるものゝ一つは英國が特に地理的條件に恵まれてゐたとなす說である、即ち工業の發達に必須な鐵及石炭が殆ど地を同じくして產出されたのが此の國をして他の如何なる國にも先んじて急激に工業化せしめる基礎をなしたと説明するのであるが、之に對しても前項叙述のコールが發したと同様の疑問が發せられないであらうか、即ち英國が如何に此くの如き地理的好條件を具備したとするも之れを利用し得べき經濟的素地が熟して居た點を考慮の外に於ては意味をなさぬであらう、若し地理的條件のみを問題とするならば恐らく獨逸に於けるルール地方は或る意味に於て英國のマンチェスター

を中心とする地方よりもより好き條件が存在すると考へらるゝに拘らず何故に獨逸は産業革命をはるかに後れて経験せねばならなかつたか、又當時の英國に於ける經濟活動の勢ひより推して縱令現實にありし如き好條件に恵まれて居なかつたとするも、鐵、石炭の如き素材は如何なる手段を以ても之を獲得する方法を構じたであらうと察するのは強ちに牽強附會とは言ひ得ないであらう、然らば言ふところの經濟的素地とは何であるか、その眞の意味は何處に重點を置いて之れを把握するのが至當であるか、其の客觀的敘述は前項に於て簡單に試みたのであるが、それは敘述の初めにも斷つて置いた如く、言はゞ商業組織の發展の外からの靜態的觀察であるに止る、吾々は今や此等の組織を創り且つ動かしたところの主體たる商工業者の姿を觀ねばならぬ。

十七世紀末に於ける内亂 (the Civil War) に續く名譽革命 (the Glorious Revolution) の成功は王國の專政に對する議會の勝利であり、議會の勝利は或る意味に於て商工業者階級の勝利である、⁽¹⁾ 彼等は宗教的には非國教派であり從而旺盛なる個人思想を中心内容とするプロテスタンティズムの信奉者である、此くの如き信仰と思想を有する彼等が一方に於て國王の從前の獨裁的な政治に反對し、他方に於てギルドの煩はしき規律束縛を忌避しそれよりの脱却を願つたのは言ふ迄もない、何となれば彼等は個人思想の延長である企業心に燃えて居た人々であり其の蓄積した資本の力を利用して勇敢に内外の貿易に従事しつゝあつた産業上の騎士であつたからである。

今此の商工業の異常なる勃興を示す證左として當時の經濟理論が如何に發展したかを價值學說の變遷を通じて觀察して見よう。アダム・スミスの經濟理論が勞働價值説を中心として組み立てられてゐることは人の知る通りである、併しながら勞働價值説は決して彼の獨創でなく、十七世紀以來中世の價值概念たる利用價值又は使用價值に對して爲

されつゝあつた處の通説に外ならぬ、已にロックに於ても『此の世の財産の九十九パーセントは人間の労働の賜である故に財産所有の眞の基礎をなすものは労働である』と説かれ従前の價值概念に對して革命的な立論をなしてゐる。労働價值説の起源には商業を正當化せんとする強き想念が働いてゐることを注意せねばならぬ。労働價值は言ふ迄もなく交換價值の説明要件である、労働こそ財産に對する權利の本である以上交易は労働の等量の交換である故に交易は常に正當であり衡平である。

擬此處に注意を要するは、交易は労働の等量の交換なりと言ふ場合の労働の意味如何である、少なくともリカードに至る迄の労働價值説の中に於ける労働に就ては事業を組織し經營し之を指導する所謂資本家の労働が問題とされて居り財産なき資本なき労働をば價值の基礎と考へない、スミスさへも所謂労働者の提供する労働を一方に於ては總ての富の根源であると説き他方に於て之を機械の提供する勞力と同一視する混同に陷る。⁽³⁾ Sir William Petty に於ては此の點に關しての説明が極めて明瞭である、曰く同一人が同量の労働を以てペルーより銀の一オンスを齎らし同時に小麦の一ブッセルを作り得るとせば小麦一ブッセルの價は銀の一オンスである、若し同じ労働を以て二オンスの銀を齎らし得る様になり、小麦の產出が元のまゝであるならば小麦の價は銀二オンスに騰る、かくの如くにして物の價は常にその物につき込まれた人間労働の限界量に依つて決るのであるが、其の労働たるや資本を有する者がその資本を以て銀又は小麦の產出を計畫し、經營し、運搬するに用ゐる労働であつて被傭人たる労働者の労働は經營者の支拂ふ費用として價值構成の中に這入るに止まり従つて機械乃至家畜の労働と撰ぶところはない、此の關係は次の興味ある説明に最も明瞭に現はれる、即ち一人の clothier (元機屋) が彼の事業を擴張すべく澤山の貧民を雇ひ入れよう欲

する場合、若し小麥が無限に存在するとしたならば貧民は容易に傭はれようとしなから勞賃は高くならざるを得ない、故に天産が無限に創出されると云ふことは天の恵みとは言ひ得ない。

勞働價值説は後年社會主義者の手によつて巧みに發展せしめられ彼等の理論の基礎となつたことは一般に知らるゝ如くであるが此の問題に就ては後段觸るゝこととし茲にはしばらく之を措く。吾人の興味を惹くのは此の學説が商工業企業が新たな重要性を以て英國經濟部面に浮び出た時代と時を同じくして稱へられ出した點である。勞働價值説従つてそれを立論の基礎とする交換價值説は二ツの重要な面を有つ、一ツは前述せる商業の別名と言つても差支へない交換を正當化せんとする面と他は交換の主體たる商企業者（資本を有すると云ふ意味に於て資本家）を重要視せんとする面是れである、封建時代乃至その殘滓が全く清算され切らないステュワート王朝時代までは財産の主要對象たる土地は領主の所有に屬し、交換も地方的で廣域に及ばないので大規模の交換——商企業は經濟の動きの中で左まで重要な役割を演じない、之を換言するならば商人及び其の行爲は社會生活の中で甚だ下賤なものであり、其の人格さへも無視される程度のものであつたことは否まれない。従つて價值と言ふ概念も “The meaning of intrinsic value is utility, a quality which resides in it and renders it desirable.” と云ふ程度に止るが、一度び右の關係が破れ國民經濟の時代に這入ると、交換の衝に當る商人の役割は極めて重要となり、もはやその人格を無視したり下賤視したのでは動きの採れない状態となつて來る、況んや彼等の企業心が時勢の要求と共に益々旺盛となり（此の關係は彼等の旺盛なる精神が活潑なる時勢を作り出したとも言へる）、その旺盛化と共に社會的にも當時の爲政者たる貴族地主階級と同様なる若しくはそれに近き人格を認められんことを要求する、彼等が内亂又は名譽革命の當時非國教派に屬

して舊教主義的な國教派に反對の立場を採つたのは、かくて極めて當然であり、むしろ彼等の自己主張の過程が或ひは内亂となり革命となつて現はれたと觀ることのより妥當なるを思はざるを得ない。産業革命を産み出したのは決して單なる機械の發明でもなく、又資本の新たなる力（コールの言ふ資本主義）でもなく、資本に新生命を吹き込みつゝあつた處の此の燃ゆるが如き企業家的精神であつたのである。

以上が言ふところの企業主體の簡單なる描寫である、さて上述の企業者の全部が産業革命期に於ける事業主であるか否かは證明の手段もないがそれは問題ではない、吾々が觀ねばならないのは、上述企業家精神の發展である、十八世紀の啓蒙主義時代は英國民の自己覺醒史と見らるゝのであるが、それは言はゞ、庶民たる商工業者階級の間には於ける問題であつて其の下層をなす労働者の間に於ける自我の主張は更に或る時期を待たねばならなかつたことは後段述べる如くである、若し十七世紀末に於ける紛糾を商工業者の自己覺醒史の發端とするならば、産業革命期はその成就期となすことが出来る、即ち前産業革命期に於ける前述企業家的精神は其のまゝ或はより強き程度に於て産業革命期の精神であり其の趨く所政治界の變革をも餘儀なくせしめ遂に有名なる一八三二年の Reform Act の通過を見るに至り茲に商工業者は實質的にも形式的にも従前の特權階級たる地主と同列の社會的地位を獲得する、かくて彼等がアダム・スミスの理論を以て甚だ都合よく彼等の行爲及びその動機をも正當化するものと爲し、その理論の中に安心して利潤追及の道に専念したのは當時の英國經濟の必然の趨勢でもあつたのである、然らば如何なるものの上に彼等は安心の基礎を置いたのであらうか。

茲に注意し度きは、商工業者の自我の覺醒と云ふ場合の自我の内容である、從來英國の個人主義を取扱ふ場合普

通にはばら／＼なる纏りなき個人のみが問題とされる主義である様に解釋せられてゐるが、之を押し通して行くだけではスミスの理論は到る所矛盾に突き當る、それにも拘らず彼の老なる著書に接して吾々が盡きせぬ牽引力を感じるのは、冷徹水の如く見ゆる理論の奥に冷き人類愛の精神のにじむのを隨所に感じ得る爲めでないであらうか、實に富國論の壹冊は體系なき體系をなすと同時に、矛盾に富める妥當を、主張なき主張を包藏する、それは諸國民の富の原因と性質とを探る經濟學書であると同時に如何にして諸國民は其の富を増加し幸福になり得るかを考ふる倫理學書でもあるのである、然らば彼の理論の奥にあつて吾々をして矛盾を超越し人類愛の精神にひたらしむる力となつて居る或るものが存在せぬであらうか、若し存在するとしたならばそれは何か。茲に贅言する迄もなく、彼の立論は各個人の *Self-love* に根を置く行動より出發するが結果より觀れば如何に各個人勝手の行動を採つてもそれは社會の福祉を増進すると結論される、人はスミスの此くの如き態度を豫定調和なる辭にて説明せんとするが、其の場合調和を豫定するものは見えざる手であること勿論である、併しながら、見えざる手の支配を單に第四篇第一章の説明事項に限るものと解してはならぬ、富國論の隨處に出て來る個人は決してばら／＼の個人でなく常に見えざる手の命令によつて動いてゐる個人と解すべきであり、従つて説かれざる大いなる全體が想定されてゐることを注意せねばならぬ、それが直ちに國家であるとは言ひ得ないにしても、然らざる限り、「國防は富より大切である」とか「航海條例は英國法のうち最も賢明なり」とか平然と言ひ放つ彼の態度に同情を有ち得ないであらう。

産業革命期の企業者の總てがスミスの此の理論の體得者だとは解し得ないにしても、尠くともスミスの右の理論は時代の尖端を切つてゐた彼等の間に意識的無意識的に働いてゐた所謂時代精神の代表的哲學だと稱することが出来る、

即ち彼等の *Soll-love* の現れである營利行動は言はば神の命令であり、且つ國家を富まし國民の福利を増進する行動であるのであるから、各企業の中に於ける各企業者の才能技術は其の發揚の機會を妨げらるべきでなく、その資本の無制限なる活動を意味する自由競争は絶對の眞理であり、之を妨ぐるマーカンティリズムの束縛制限は此の故に當然に打破せらるべきであつたのである。

かくの如き企業家的精神こそ、資本の力を増大せしめた原力であり、機械發明乃至應用を工業界にもたらした源であり、従つて産業革命の母である、よつて起つた所の工場制度及び内外市場の擴大は、彼等の企業精神を活躍せしむる爲めの新たな檣舞臺であり、彼等の擁する資本の力は其の場所と使用主とを得且つ次項以下に述べんとする無数の勞働者を用ゐることにより、茲に全く新しき經濟制度たる所謂資本主義が出来上る、筆者がコールに反して産業革命を以て資本主義制度の産みの親となすはかくの如き意味に於てあり、又かくの如く主體の動きの面に照すに非ざれば産業革命の歴史の意味は極めて薄らいで來るやうに考へる。

(1) 拙稿、合理主義思想の先驅としての社會契約説。

(2) A. Smith, *Wealth of Nations*, Book I, chap. 8, Book II, chap. 5.

四

45
以上の如き意味に於て、當時の資本家がスミスの説く個人主義思想を彼等自身の個人企業に於ける彼等の才能技術の無制限なる發揚を正當化するものと解し、又其の自由主義を彼等の擁する資本の無拘束なる活動を理論化するもの

英國産業革命の主體的考察

となし、資本を有せざる階級即ち新しく發生した労働者の個人格及自由を後述する如く無視したとするも、彼等に取りては労働者の提供する労働は前述せる如く家畜奴隷乃至機械の提供する労働以上のものでなく、従つて個人主義の中に於ける個人権の要求資格者ではない、新制度の擔當者は完全に商工企業者たる資本家であつて、單に労働を提供する能力しか有たない労働者ではない、故に労働者が家畜乃至機械と同一視せらるゝことに甘んじ自己を主張しない限り資本家は Smithism 又は Benthamism の中に何等の矛盾を感じることなく安んじて其の活動を續け得た譯であり、其の限りに於ては新個人主義思想は完全に理論と實際の合致する眞理であり得た譯である、此くの如き場合總ての經濟政策が資本家本位であることは極めて當然である、蓋し前にも述べた如き意味に於て新制度の擔當者たる彼等個人の利益は直ちに全體の福利と相通するものであり、他の如何なる利益も彼等の利益の爲めには犠牲とせらるゝところ國家社會の福祉の増進に外ならないからである、併しながら資本主義制度は多數の労働者の存在を必要とする、而して彼等の社會的地位がギルド時代の apprentice の身分と異なり一ツの社會階級として存在する様になると、生涯を通じて家畜奴隷視せらるゝ苦痛に堪へられなくなり資本主義制度は從來全く經驗しなかつた所の労働者の自己覺醒に基く一ツの様相を呈するに至る、かくて主體の動きを考察の目的とする吾々は此の新様相が如何に發生し發展したかの討究に移らねばならぬ。

先づ労働者階級が如何にして發生したかを觀よう、其の爲めには多數労働者の供給の場である人口増殖の状態を觀ねばならぬ、マルサス人口論（一七九八年）の出版の動機は彼が當時の急激なる人口増殖の中に生活標準が最低限に引き下げられ、其の結果總ての社會制度が根柢より破壊される危險を感じたことにあると言はれる、マルサスをして此

の危惧に陥れた人口増加の状態を數字を以て示せば

第一表

第二表

年次	増加實數	年次	總人口	救貧法ニヨル救濟金支拂總額 ^磅	人口一人當 ^志 片 ^リ
一五〇〇—一六〇〇	百萬以下	一七六〇	七、〇〇〇、〇〇〇	一、二五〇、〇〇〇	三七
一六〇〇—一七〇〇	百萬以下	一七八四	八、〇〇〇、〇〇〇	二、〇〇〇、〇〇〇	五、〇
一七〇〇—一八〇〇	約三百萬	一八〇三	九、二〇〇、〇〇〇	四、〇七七、〇〇〇	八、一一
一八〇一—一八三一	約五百萬	一八一八	一一、八七六、〇〇〇	七、八七〇、〇〇〇	一三、三

此の救貧法による支拂額の増加こそマルサスをして言はしむれば人口増加の直接原因であり、従つて救貧法は社會惡の根源をなす惡法である、ハモンドは當時の人口増殖に對して異なる見解を採る、即ち人口の増殖に對する力強き一般的な刺戟となつたのは、救貧法でなく第一に新工業組織による幼年工の使用を擧げねばならぬ、幼年工の使用は強ちに産業革命期に始まつたのではないが營利に汲々たりし新産業主が此の狀態を促進したことは否み得ない事實である、被使用者たる貧民の側より觀れば如何に産兒數が多くとも多々益々辨ずる狀態であつたので家族のサイズの大なることは収入の増加を意味する、此の狀態は少くとも産業革命期の都會に於ける一特長であると彼は説明する。

コールは之等の説明に抗議する、彼は人口と社會狀態との關係を重視して『經濟變化に應ずる爲めに家族のサイズがふくらむ故に人口増加が起ると云ふのは適當でなく、人口を制限する傾向ある制度習慣の破壊が起ることによつて人口狀態が變化するのである』と説明するが然らば何故に、如何にして舊制度舊習慣の破壊が起るかが直ちに問題と

一 橋論叢 第八卷 第二號

なるのであるが彼は此の點に就ての説明を與へない。

次に産業革命期に於て重要な意義を有つところの農村人口の都市移住に就て觀るに、先づ農村人口の減退は次表の如くに現はれる、

一八一—	總人口ニ對スル農村人口ノ割合	三五%
一八二—		三三%
一八三一		二八%

註、十七世紀末ノ數字は不明

之に反してランカシャー及びヨークシャー地方の都市人口の増大は救貧法の規定による Cottage (或る意味に於て労働者の身分を全く隷屬的のものとするところの) の供給をさへ不可能ならしめる程急激であつたと言はれてゐる、農村人口減退の最大なる原因としては、農業に對する科學的方法の應用、大農法及輪耕法の採用、エンクロージャの瀾漫及び Common field system の破壊等が擧げられる、之等は何れも、農民をして或は其の生業の基礎である土地を失はしめ、或ひは彼等より副業の手段を奪ひ、或ひは必要農民の數を減少せしむるなど一として彼等の生活苦を深刻化せしめざるものとはなく、其の離村は今や必然の趨勢となつて來た、而して都市に於ける工場の勃興が其の逃げ場となつたのは勿論であるが此くの如く工業都市に集中した人口の大部分は上述の資本家に雇傭せられ茲にギルド的束縛を受けないけれども然かも終生殆ど資本家たることを得ない近世的労働者階級が現出する。

彼等は新産業制度の下に如何なる地位に陥れたかと言ふに凡そ次の三様に説明せらるゝ、

一、機械の發明及應用は一躍労働者の一人當りの生産力を激増した、依つて同數の労働者に職業を與ふる爲めには其の生産品に對する市場の擴大を必要とする、即ち労働者の就職の機會は市場擴大の確保に密接に依存する。

二、機械の應用は熟練職工を不要とする故に多數の不熟練工が工場に集中せしめられる、加之營利にさとき工場主は賃銀を最低限に引き下げ労働時間を最大限に延長する爲めに最も抵抗力弱き且つ生活程度の低き女工少年工の雇入れに熱中した。

三、水力又は蒸汽機關の應用によつて現出した大工場の設立は多數労働者の工場集中を促し、且つ高價なる機械の設備を惹起した、高價なる機械の使用は所謂間接費を生産費の主要なる要素とした、間接費を最小限に切り下げる爲めには機械を最大限に運轉せしめなければならぬ、機械をして最大限の能率を發揮せしむる爲めには動力費を出来るだけ細分すべく労働者の工場密集を必要とするのみならずその強度の労働を必要とする、かくて労働者の生産能率の増大のみならず労働強化が強要せらるゝ。

かくて産業革命は上述の如く資本家に對して輝かしき時代を齎らしたに拘らず労働者に取りては陰慘なる世界の展開に外ならなかつた、機械の發明は元來人間労働節約の爲めに起る、併しながらそれは之を使用する工場主に取りては労働節約の道具にあらず生産増加の手段である、ハモンド夫妻はその有名なる著書の中に此の間の事情を次の如く説明する。

The new industrial system which robbed this society of its freedom robbed it of its pleasures. If the introduction of machinery had taken place under a system that allowed the workers to control it, that system would

have increased leisure and so made the life of man happier ; it would in fact have done what the philosophers claimed for it. But the machinery was introduced under a system that placed the workers at the disposal of the owners of capital, who valued machinery as a means, not to a larger and richer life for the workers, but to greater and quicker profits for their enterprise. (Skilled Labourer, p. 6)

ハモンドの此の叙述は感情に走りすぎて歴史の真相を掴んでゐない、労働者が機械を管理し得る時代にそれが發明せられて居たならば新産業制度はもつと人間を幸福にしたであらうと彼は考へるがそれは希望的な想像に過ぎない、機械の發明は屢々言ふ如く企業的 spirit の產物に外ならず『労働者が之を管理し得る様な時代』にその發明が起り様がない、又元來餘暇造出の銳器が利益増大の手段に供せられたと言ふ彼の歎きも人道的な彼の立場から一應尤もではあるが、當時の社會構造の擔當者はあく迄も企業者であつて労働者ではない、まだ個人格の要求資格者でさへないところの彼等に對して餘暇とか労働節約とかは問題でなく之等が問題となるのは唯企業者だけである、機械の應用は労働者の餘暇を奪ひ労働を強化したのみでなく企業者自身をも極端なる多忙に陥れたに相違ない、若し労働運動の盛んな時代に爲されたハモンドの言が産業革命の當時發せられたとしたならば彼等企業者は言下に「吾々の増産は社會の福利増進に外ならぬ、餘暇なしと歎く労働者よ、吾々の此の多忙を見よ」と答へたであらう。當時の英國の社會狀勢は恰も戰爭の場合に酷似する、戰爭が勃發すると全國民の總資力總努力は擧げて戰爭目的遂行の爲めに集中せらるゝ、總てのものの價値は此の目的の爲めにどれ程の能率を持つかによつて判斷せられ總ての判斷の標準は此の目的を度外視しては殆ど間違ひと言つて差支へない、産業革命時の英國の最大目標は如何にして此の國をして世界の商工業の霸

者たらしむるかにある、成功の標準は生産の多寡であり利潤の大小である、未だ市民ではないけれども生産にたづさはる労働者は右の大目的完遂の爲めに當然に時代の先頭に立つ企業者の努力に協力せねばならぬ。

さは言へ新發明によつてもたらされた此くの如き輝かしき事象も久しからずして幸福と自由とを無視せられ蹂躪せられた下層階級の自覺を喚起し英國は茲に新たな問題に悩まねばならぬ時代に這入る、機械による生産の激増が物價の下落を惹起したのは事實であるが、生活費は其の割合に下落しては居ない、其の理由は農産品の生産は縱令新式の農法が採用せられて増加したとは云へ其の増加は到底工業生産品の比にあらず、加ふるに一七九三年ナポレオン戦争の勃發は一方に於てインフレーションを、他方に於て穀物に對する需要の激増を惹起し此處に物價の一般的躍進を招來した、然るに賃銀は貨幣價值の下落と歩調を合はすことを得ず實質賃銀は低落の一路を辿る現象を呈出した、此の狀勢が労働者をして窮乏より悲惨へと陥れたことは勿論である。

新産業制度が其の基礎を幼年工の雇傭の上に置くと同時に、労働者階級の受難史が彼等の酷使に始まることはハモンドの説明する如くであるが、今労働の供給と云ふ面から觀察すると幼年工の雇傭は凡そ一八〇〇年を境として異なる様相を呈する、工場制度成立の初期に於ては前述エンクロージャ、科學的農法の採用及其他の理由により農村地方に於ける労働力の過剰が起つたが、未だ労働人口の工業地方への移住充分ならず、都會に於ては勞力不足を経験せねばならなかつた。産業革命がもたらした最悪の弊害の一つとして挙げらるゝ Parish apprentice が殆ど奴隷にも近き状態に於て工場に虐使せられたのは此の時期である、Parish apprentice とは兩親の窮迫の爲めに救貧法によつて救貧院に送られ係り官の保護に委ねられた貧兒を指すのであるが、彼等係り官は當時漸次増加しつゝあつた授産

所内の貧兒救護の煩雜と負擔とを免かれん爲めに、一定年期の賃銀を前取りすることにより事實上彼等を工場主に賣渡し、之を買取つたところの、而して勞力の不足を痛感しつゝあつたところの工場主は其の欲するまゝの勞働を彼等に課したのである。David Dale と稱する篤志工場主がその經營するニューラナークの工場に於て之等不運なる兒童に同情して僅かに勞働時間を短縮したことが特記すべき事實として取扱はれてゐるのは如何に當時の兒童虐使が一般的であつたかを證明する、世界最初の工場法として知らるゝ Sir Robert Peel の Health and Morals of Apprentices Act (1802) が現はれたのは此くの如き事情の下に於てであつたのである。此の法律の内容を簡単に説明すると、其の適用は木綿及羊毛工業に於ける apprentice 三人以上 Free child 二十人以上を使用する工場に對してだけであり、此の如き工場は清潔通風をよくし一日二十時間以上作業せしめてはならない、夜業は一八〇三年以後は之を禁止する、其の他此の法律は兒童の勉強、衣服、寢室等に就て規定するが最も重要な點例へば年齢賃銀に就ては何等の制限を設けない。ロバート・オーウェンは三歳の幼兒が工場に働かされてゐたと云ふことを聞いたことがあると述べる。何故にかゝる常識にても考へ得ないことが行はれたかと云ふに、彼等は主に機械掃除の爲めに使用せられたのである。即ち機械の下に潛入して綿屑を拾ふ爲めには體軀の小なるものほど便利なるが故にかくは不條理が横行したと思はれる。

ビールの幼年工保護法は Parish apprentice 保護の爲めに設けられたのであるが、此の法律が通過した一八〇〇年の前後に於ては勞働の供給状態は全く一變し該法は自ら不要に歸したのである、何となれば前述都市に於ける人口膨脹の速度は工場に於ける勞働需要の速度をはるかに凌駕し豊富なる自由幼年工の供給は Parish apprentice を工場よ

り驅逐したからである。併しながら是等低廉なる幼年工は成年工の職場を奪ひ、従つて幼年工が労働者階級の家族の中に於ける唯一の収入源泉となつた、其の必然の結果として此の階級の生活程度は急激に低下して行つた、加之ナポレオン戦争の勃發は軍需部門に於ける英國工業の發達を促進せしめたに反し、主要産業たる纖維工業をば極めて不安定なる地位に陥れたが故に此の方面に於ける労働者の雇傭状態も安定を失ひ其の生活標準は益々惡化した、戦争及び之に續く時期は労働者階級の受難の歴史の中に於て最も陰慘な時期であると言はれる。フランス革命の影響により發生したラディカリズムの中心指導者は縱令以上の意味に於ける労働者ではなかつたとは云へ、彼等が悲慘の極に悩む労働者階級を刺戟して漸次自覺に導いたのは否むべくもない。然るに革命の暴力に對し極度の恐怖を感じつゝあつた政府當局がラディカリスト及び既に其の影響下にあつた労働者階級に對し無謀なる彈壓を以て臨むに當り茲に労働者の自己覺醒史の第一ページを飾るところの所謂労働運動の發生を見る。

(1) J. L. Hammond and Barbara Hammond, *Town Labourer* chap. I.

(2) Cole, *Op. cit.* chap. II.

附言 與へられたる時間と紙數に於て未完結のまゝ本篇を發表せざるを得なかつたことを遺憾とする、筆者は他日稿を改めて續篇を發表するであらう、讀者の寛恕を乞ふ次第である。